

ファンならば、ファンなれば、こそ

真冬真夜中午前二時、JF2016 徹夜組の外側から

石田沙織

(明治大学大学院情報コミュニケーション研究科情報コミュニケーション学専攻)

1 自問として

ファンである、ということは何なのだろう。ファンを「ファンという自覚があるゆえに、『ファンであること』そのこと自体を解釈しながら活動している」「『ファンである自分』の解釈者」¹としてとらえる知見に立てば、一おたくである身に降りかかる問いに腑が落ちる。それはたとえば「私はファンなのか?」「ファンであるならこういうことはしないのではないか?」「ファンであるからこそその行動でもあるだろう、が、ファンであるからこそしない行動とも言えないか?」というような懊悩と葛藤と問いである²。

今回ここで取り上げるのはそんな「ファンならば/ファンなれば」という問いに関係する、とあるイベントにおける(女性)ファン達の行動である。観察記録兼覚書として、順を追って記していきたい。

2 ジャンプフェスタにて

『ジャンプフェスタ』というイベントがある。平易に述べれば年に一回、12月の第3週の土日に千葉幕張メッセで開催される集英社主催のファン感謝祭ともいべきイベントである。週刊少年ジャンプをはじめ集英社の青少年向けに発行されている漫画雑誌5誌に掲載されている作品を中心に、「展示」と「販売」を二柱として、原画展示やミニゲーム、アニメ化している場合には声優トークイベントやグッズ販売、ゲームのデモ体験などが展開される。大人から子どもまで、兎角色々楽しめるイベントである³。

だが、特に販売面における「限定」「先行」、催事としての「トークイベント」という文言に纏わり付く一回性においては強く人を刺激し——現れるのである。「徹夜組」と呼ばれる、開場時間前どころか前日夜から会場前に並び待つ人々が。

案の定、2015年12月19日・20日と二日間にわたり開催されたジャンプフェスタ2016でも、徹夜組への批判や非難がイベント前からTwitter上に散見された。そして初日、9時開場から暫くして筆者のおたくタイムラインに流れてきたのは「開場30分でグッズ完売」の一報だった。あわせて「徹夜組でも買えなかった」その人気振り、販売側の対応などへの不満などが続く。そう、このグッズは「徹夜組」でも買えなかったのである。

ジャンプフェスタの徹夜組。これはなかなか一筋縄ではいかない存在であり、問題である。何故なら、集英社側が千葉県の青少年健全育成条例⁴を元に徹夜は「遠慮」してほしい旨告知しているが、「禁止」しているわけではないからである⁵。禁止されていない以上、あくまで主催者側からの「お願い」に過ぎない。お願いされた側は、相手の心中を忖度し配慮しこちら側の行動を決めるのであって、勿論お願いを聞かない、と

¹ 池田太臣「共同体、個人そしてプロデュセイジ——英語圏におけるファン研究の動向について——」(甲南女子大学研究紀要第49号 人間科学編:2013,116)

² 筆者は二次創作活動に従事する「腐女子ネイティブ」であるため、「キャラ改変問題」「原作への愛着と不満のジレンマ」「『これだから腐女子は』言説」等に直面するとすぐ脳内学級会を開催してしまう。

³ 詳細は「ジャンプフェスタ2016」内「ジャンプフェスタとは?」参照のこと。<http://www.jumpfesta.com/information/> 最終アクセス 2016.01.31

⁴ 「千葉県ホームページ」内「千葉県青少年健全育成条例の概要」第23条参照。

<https://www.pref.chiba.lg.jp/kkbunka/kenzenikusei/jourei-gaiyou/> 最終アクセス 2016.01.31

⁵ 「ジャンプフェスタ2016」内「ルール」参照。<http://www.jumpfesta.com/rule/> 最終アクセス 2016.01.31

いう行動も出てくる、ということだろう。

事実、ジャンプフェスタ開催前後、「徹夜組」という単語一つを **Twitter** 上で検索を掛けると徹夜組への批判だけでなく、徹夜組当事者の意見も拾えた。運営側が徹夜組の列形成を率先し入場させているのだから公認であるし、徹夜組が悪いわけではないというのが主な主張である。その中の一人いわく、徹夜をしなければならないような仕様にした運営側の責任である、とのこと。なるほど、彼女の言い分もその通りで、筆者は他のイベントでの徹夜組への対応例を話に聞いたことがあるが、結果として徹夜組がペナルティを受ける対応となっていた。しかし、ジャンプフェスタにおいて徹夜組はペナルティを受けることなく、先頭集団として入場することになる。早速一日目終了後、上からの指示として（二日目狙いの）徹夜組の待機列を整理するスタッフから話を聞いた参加者による怒りのツイートが見られた。「集英社は徹夜を公認している」とマッドマクハリ・怒りの徹夜ロードである。それはそうだろう、主催の「お願い」をきちんと聞き入れた者が損をすることがその列を見れば一目瞭然なのだから。

話を戻す。件の商品はアニメ化された少年ジャンプ掲載作品『ハイキュー!!』のジャンプフェスタ限定グッズである。開場早々完売し、その時間は開場 15 分だったり 30 分だったり情報が錯綜していたが、その中で「自分は徹夜組だったけど買えなかった」という情報は作品の人気振りを示すものとして挙げられていた。深夜 1 時 2 時、寒さ厳しい中屋外に並び朝 9 時の開場を待ち、いざ買おうとしたら完売。悲劇、ではある。だが、思い返してみれば徹夜組でも買えない、の前に、徹夜は非推奨の行為ではなかったか。だからこそ徹夜組への怨嗟や非難・批判のツイートが噴出するのではなかったか。この裏返しは、何故行なわれるのか。

実のところ、ジャンプフェスタ徹夜組はお願いを聞き入れた人々の共通の敵である。——というわけではない。寒さもお願いもなんのその、無敵の徹夜組にも敵がいる。それが「転売屋」だ。先に挙げた一人の徹夜組当事者も怒っていた。「徹夜組＝転売屋」という偏見に腹が立つ、と。

転売屋とは簡単に言えば商品をネットオークション等で転売して金銭を稼ぐ人のことである。転売される商品の中には元値よりも高値の場合もあり、更には当該商品が限定だった日には買えなかった人々からの非難轟々である。「転売するため」に買占める行為は是とされることはない。

これを踏まえると、つまり「徹夜組」と一括りされる中にも「商品を多く仕入れ転売することを目的とする者」と「自分が欲しいもの（商品やイベント観覧の良席等）を確実に入手することを目的とする者」として、両者の意識の差が現れる。そして後者の徹夜組は前者の徹夜組を批判対象とし、自分達とは違うのだと口にする。何故ならば、冒頭で示したように「ファン」であることに自覚的であり、ファンだからこそ徹夜で列に並びという選択をした自分達に対し、転売屋はそうやって入手した商品をあっさり換金してしまう存在だからだ。

そして、「徹夜組でも買えなかった」と言うとき、その「徹夜組」が意味するのは転売屋ではなく、もう一つの徹夜組であるファンのことなのである。「徹夜をして並んででも欲しい」という逸脱的選択をしたほどのファンでも買えなかったのだとすれば、それは手段に難あれど同情すべき事由として加味され、対象の人気の高さの裏づけにつながったことが推察される。徹夜をしてでも欲しいというほどのファンでも買えなかったのだとすれば、元々生産数や販売制限等、販売側にも問題があるのではないか、という意見も出てくることもあるだろう。

しかしながら、どこまでも徹夜組の実態は解らない。表向きは推奨されていない行為であるために、**Twitter** 上で「徹夜組です」なんて呟く人は実は稀である。徹夜組当事者が言うように「徹夜組＝転売屋」は偏見なのかどうかすら解らない。百聞は一見にしかず、イベント会場が地元であるということからも、徹夜組を実地にて確認・記録することにした。概要及び観察記録としてスマートフォンに打ち込んだメモには感想なども多分に含まれているため公平性に欠くが、これを時系列順に並べたもの（表 1）は最後に記載した。

3 徹夜組としての「ファン」

さて、この観察の要点だけを述べれば、確かにその場には「転売屋」だけではなく「ファン」だろうと確認できる人々が多くいた。特筆すべきは、夜中かつ街灯の少ない公園ということもあり、正確な男女比等は測れなかったが、女性のファンの姿が目をついた点である。それはひとえに「痛バッグ」と呼ばれるもののような、好きなキャラクターの缶バッジやストラップ、人形を大量につけたバッグ、キャラクターがプリントされたタオルケット、そういったものを身につけ、「どの作品・キャラクターが好きであるか」を外部にに向けて表明している者が多かったためである。彼女達の会話に耳をそばだてれば、「青峰⁶」について語っていたり、「大地さん⁷」について語っていたり、同人誌即売会の開場前の待機列でなされるような会話が拾え、こう言って良いものならば、万全な寒さ対策をし、「徹夜組」を満喫している人々がそこにはいた。

その待機列整理を担当していたスタッフ男性も、女性が多くてびっくりしたと述べていたように、真夜中の寒空に「ジャンプフェスタ」のために並ぶ女性の姿は何も知らない人が見れば驚くものなのだろう。思い返せば、徹夜組当事者にせよ徹夜組への怒りを顕にする者にせよ、目についたツイートは総じて女性が呟いていた。あくまで「目についた」だけで、統計を取っていない時点で単なる筆者の感想である。その点を念頭に置きながら改めて見れば、最初の「徹夜組でも買えなかった」という人もそう、「徹夜組が悪いわけではない」や「(転売屋に) 負けたくない」、「徹夜組を公認しているのか」と、Twitter上で「徹夜組をすること」の是非に言及していたのは女性だった⁸。当然転売をする女性もいるだろうし、並んでいる中には缶バッジ等のグッズをバッグにつけた男性のファンもいた。だが、ジャンプフェスタ徹夜組に「ファン」という視点を持ち込み外野から見たとき、そこには女性の姿が想像以上に浮かび上がってくるのである⁹。

こうした徹夜組を選択した女性達のグッズを対象とした消費行動の背景には、「ファンである」という自負があり、痛バッグやキャラタオル等も他者に向けての「自分は〇〇が好き」という愛着の表明であり、主張となることが推察される。一方で、徹夜組を批判する女性達の行動の背景にも、同じように「ファンである」という自負があり、それ故に公式の提示した規則を守るという選択を取ることで、「好き」であることを理由にした逸脱を抑制し、自律の表明をする。同じように両者とも「ファン」であるのに、かくも行動は異なる。

従来のファン研究にならえば、前者は個人としてのファンの一例であり、そして「ファン」に付随する逸脱性のイメージを垣間見せるものである。一方後者は共同体としてのファンダムの一例であり、個々への規範の内面化を垣間見せるものとして位置づけることができる。この両者のどちらが「ファン」としてあるべき姿か、といった俎上に乗せることは筆者にはできない。——ここで冒頭に戻るが、筆者が抱く「ファンである」ことへの困惑と懊悩と葛藤もまた、この両者の間で生まれていることが大半なのである。

たとえば後者に属する筆者は、某作品のファンでありつつ二次創作している身として、原作者の先生、ひいては版元のお願いは絶対であるため、当然徹夜など選択肢にも念頭にもない。ファンであるならば、迷惑をかけるようなことはしてはならない、というような規範が内面化されている。しかし、限定グッズに原作者書下ろし・再販なしの小冊子がつくとになれば心は揺らぐし、徹夜組の道を選びかねない。とはいえ公園にごみを放置し、スタッフにごみ拾いをさせるなんてもってのほかだとも思うし、子どもがいるのもいただけない。親に手を引かれ寒空にうつらうつらとする子どもの姿は、いつもならもう眠っているのだろうなと胸が痛んだ。どんなに規律正しい徹夜組であろうとしても、それは「徹夜組をしてもいいのだ」という理解を周囲に与えることに他ならない。

だが、自分が徹夜をしなくても他の人がしたら手に入れられない可能性が高い。それも悔しい。正直者と真面目な者が馬鹿を見るなんて冗談じゃない。頭は腐っていても根は真面目なのだ、そこそこに。それとも

⁶ 藤巻忠俊『黒子のバスケ』（集英社）の登場人物・青峰大輝のこと。

⁷ 古舘春一『ハイキュー!!』（集英社）の登場人物・澤村大地のこと。

⁸ たとえば「徹夜組きた」「徹夜組待機」といった状況報告的なツイートは性別問わず見られるものである。

⁹ 「ジャンプフェスタの女性ファン」に関しては本稿では指摘するだけに留めるが、今後取り組んでいきたい点である。

最近のジャンプは「努力・友情・勝利」ではなく、「出し抜き・裏切り・勝利」なのか。『DEATH NOTE』¹⁰がそうだった。ならばしょうがない、わけはない。よって「限定グッズはやめた方がいいと思います！」と平等精神を建前に、機会均等を意見するしかできない。公式とファンとの関係において、突出した存在をなくそう大作戦である。だが、そのような公式とファンとの関係が均一であることが徹底化されることは、何ももたらすのだろうか。それは今日において有効なのか。可能なのか。どのような意味があるのか。

——そういう身勝手さを抱えつつ、「ファンである」ことを今日も今日とて考えさせられる事態に直面するたびに、筆者は何度も一人で勝手に困惑し、脳内学級会を開いては葛藤するのである。

【参考文献】

池田太臣、2013、「共同体，個人そしてプロデュセージ——英語圏におけるファン研究の動向について——」

『甲南女子大学研究紀要』第49号人間科学編、107-119

コミックマーケット準備会編、2005、『コミックマーケット30周年史』有限会社コミケット

原田曜平、2015、『新・オタク経済 3兆円市場の地殻大変動』朝日新聞出版

¹⁰ 大場つぐみ・小畑健『DEATH NOTE』（集英社）

時刻	メモ	註
00:47	というわけでやってきましたジャンフェス（見るだけ）。いわゆる終電組が会場つくだろう頃です*1	*1 実際の海浜幕張駅着の終電は1時9分である
00:51	会場に向かう階段付近で五分、26人通過、男5人、女21人	
00:59	会場付近のスタッフさんに聞く。徹夜組は会場道路挟んで向かいに、まとめられたあと、入場させていく。「黙認というか、仕方なくやるしかない」と。30メートルくらいの間隔でスタッフさんが案内。朝までやる、とのこと、	
01:03	事務局男性ようやく一人。警察は三人。列の先頭は男性女性。40は越えている女性二人。最初に並んでいて、今まさに交代。休みに行く模様。一種の協力体制	*2 千葉県青少年健全育成条例では、保護者は特別な事情がない限り青少年の夜間外出（午後11時から午前4時まで）をさせないよう努めなければならない、とあるので、アウトとも断言はできない
01:07	先頭の人はお昼くらいから並んでいたとのこと。スタッフさんに男女比について聞く。「パッと見た感じ女性が多いですね、ちょっと吃驚しました」と。	
01:10	先頭から200人くらいは男女比1:2。今のところタオルや缶バッジなど、黒バスのグッズの女性が目立つ	
01:11	完全に事務局が列整理している	
01:13	こら転売屋さんじゃねえよ、普通にファンだよ、ファンが、並んでんだよ	
01:15	一目目参加者も多いか。袋を持っている	
01:22	はっきり言えば。女性が多いからこそ。事務局も対応せざるを得ないのではないかと。人通りが多い街でもない、夜に列を作らず散らすことで性犯罪をはじめそういう被害が出るかもしれない。ただ、この列をまず入場させてしまうこととは話は別だろうね	
01:24	キャリーカートのおおさ。アルミシートも散見される	
01:25	子供がいる。小学校中学年ほど、10歳前後か	
01:26	一緒にいるのは父親というには歳が…おじいさん、か？	
01:29	小学校中学年ほどの男の子と母親。母は段ボール持参	
01:30	凄く、凄くみな楽しげに話し笑ってる。	
01:33	最後尾にまた男の子中学年高学年。お父さんとか。なんとなくこの子が来たくてきたのではないかと、思われる	
01:34	今の段階で男の子2人女の子2人。小学校ほどの、ね。保護者はあり。でも。ダメだろ	
01:37	10分前に橋を渡らせはじめる。会場前に	
01:44	大人の付き添いあっても既に小学生だろ四人ほどの子どもを幕張の徹夜組の中に見たので、来年真剣に対策を考えて欲しい。ふたご座流星群見るために夜寒い中外にいるのと何が違うのかと言われたら、悩むけど。とりあえず条例としてアウトなのは確か*2	
01:46	皆ね、楽しそうなの。徹夜組のみなさん、笑って話してるの。自分が今何故ここにいるのかを振り返らずに	
01:46	最後のは余計	
01:53	現時点で。もう少し後に橋を渡らせずにこちら側の敷地だけで列を作っていくとのこと	
02:00	お手洗いは会場内にあるのでそちらをご利用ください、というアナウンス。分岐点、では、展示ゾーン組が多いか。所謂企業ブース	*3 所有しているグッズのこと *4 中学生以下に配布されるおみやげのこと *5 筆者は『黒子のバスケ』の海常高校好きであるため、同好の士が徹夜組という手段を選んだことへの悲しみがあつた
02:03	既に会場内、もとい、室内には入れているとのこと	
02:03	今の時点で手荷物検査実施している	
02:05	四人目の子どもが販売列の方に。もう眠りそう	
02:06	黒バス銀魂ハイキュー、かな。今の所良く見るのは*3	
02:08	徹夜組にも手荷物検査実施中。もう意味がわからない	
02:14	さて。列がほとんど中に。試しに並んで抜けるのもありか	
02:23	まずは展示ゾーン。既に10人程度に配ったそう*4	
02:24	真後ろに小学生低学年な子が…	
02:30	はい！寝る準備開始！寝る準備開始です先頭集団！この方々が朝待機列で化粧直しをするというまさにその人らなのか……準備万端	
02:38	現在20名ほどの中学生以下、最年少は4.5歳の子。男女比半々	
02:42	オリジナル（グッズゾーン）400。展示（ゾーン）1000ほど並んでいるとの徹夜組同志の情報	
02:45	中学生以下に配布される記念のあれが既に20近く出ているとのこと。男女比半々、最年少は4.5歳の子。人は配置されていて、最初から深夜対応ある旨説明されてたという	
02:49	ゴミ拾いをしているスタッフさんたち。そのゴミは徹夜組のかはわからない	
02:55	深夜のゴミ拾いはやはり徹夜組のとのこと。列移動後の橋の向こう側の場所の後を。多いのはガムテープ、それから新聞紙、要は場所取りのための。ここは何人分、といった	
02:58	かえりみち、海常バッグの方とすれ違った。悲しかった*5	
03:03	さよならジャンプフェスタ	
【概要】		
日時・場所：2015年12月20日0時47分から3時3分まで、幕張メッセ（ジャンプフェスタ2016会場：千葉県）にて		
目的：漫画・アニメ・ゲームの購買・購読者層の消費行動の一形態としての徹夜組の観察		
手段：観察を主に、適宜イベントスタッフへの簡単な質問。メモはスマートフォンに打ち込む形で記録。状況記録のための写真も適宜撮影した。		
イベントスタッフへの質問は、自身が大学の研究者であり、上記の目的を告げた上で、あくまで相手の方の業務に支障がない範囲で行なった。中には、徹夜組の列に並ぶでもなく列を眺めてはスマホに何かを打ち込んで不審人物候補として声を掛けられた感覚も無きにしも非ずだったが、その際にも好機とばかりに同じように自身の身分と目的を告げた上で、簡単に質問をさせてもらった。この場を借りて、イベントスタッフの方々には感謝を申し上げたい。		

表1：ジャンプフェスタ2016徹夜組観察メモ・時系列まとめ（石田2016作成）